

# 図書館利用教育が与える 大学生の図書館利用への効果について

渡 邊 雄 一

## 〔抄録〕

本稿は、大学生を対象としたアンケート調査から、図書館利用教育が大学生に与える影響を考察するものである。図書館利用教育は初等教育段階から様々な場所で行われ、またその内容も一様ではない。したがって、その分析視点として図書館利用教育の有無、程度、時期を取り上げ、現在の図書館利用との相関をみることにした。これらの考察の中から、最も効果的に情報リテラシーを育成する図書館利用教育の在り方を提示することが本稿の主旨である。

キーワード：図書館利用教育、図書館利用、大学生

## 1 はじめに

現在、図書館利用教育が各大学において実施されているが、図書館利用教育を受けた学生は其後の自分自身の学習活動にどのような効果を及ぼすのだろうか。そこで、アンケート調査を実施し、図書館利用教育を受けることによって、図書館利用（本調査では佛教大学図書館の利用）にどのような相違が現れるのかという点を明らかにすることにした。

これまでの大学生の図書館利用に関する調査によれば、切石文士ら（1995）は、高校までの利用指導の貧弱さの後遺症なのか「学ぶことを学ぶ」という「学び方」の本当の意味を知らない学生が多いことを指摘し、大学生だから、大人だから、一人前だからと、ほおっておいてはいけない現状を報告している<sup>(1)</sup>。また、長田秀一（1984）は、自らの調査結果から、更に詳しく学生の図書館利用の実態を調査し、その結果を図書館利用教育のプログラムに取り込む必要があるとしている<sup>(2)</sup>。そして、岡田靖は、1970年代に学生の図書館利用調査を行って、図書館利用教育の必要性を指摘しているが、1990年代に入ってこの継続調査を行い、図書館利用教育の程度と学生の図書館利用にどれくらい相関があるかを調査している。そこで、岡田（1976）<sup>(3)(4)</sup>

(1995) と岡田と共同研究を行った佐藤允昭 (1996) の調査結果をまとめてみる。

この調査では、図書館利用教育を詳しく受けた者、簡単に受けた者、受けた気がする者、受けていない者の4グループに分け、図書館利用行動との相関を調べている。岡田によれば、詳しく教わった方が明確に図書館利用の良い方向に向くと思いがちであるが、必ずしもそうでなく、図書館利用教育の影響がみられる面とそうでない面があることを指摘している。特に図書館に関する知識への影響と学生自身の図書館における行動に与える影響には、若干の違いがある。具体的にいえば、学生の図書館での利用行動、つまりどのような目的で図書館を利用するのかといった行動パターンに関していえば、詳しく教えられた者とそうでない者どの間にはっきりした違いがみられなかった。次に、図書館に関する知識、つまり目録や索引の存在、目録の種類やOPACに関する知識は、詳細に教わったグループ程よく知っていて、図書館利用教育の効果が出ている。知識が必要となる行動、つまり目録、OPACの使用や資料の検索手段では、詳細に教わった者の方が高い利用率を示し、図書館利用教育の効果が出ていた。時期については、中学、高校、大学で分け、中学で教わった学生が大学で教わった学生に比べ、図書館を勉強室代わりに使用する率、資料を探す際、直接書架に行く率等が低いことをあげ、早い時期に教わると図書館の有効な利用ができることを述べている。

佐藤の調査は先ほども述べたとおり、岡田との共同研究であるので、設問や分析などは岡田と同じ調査方法をとっている。<sup>(5)</sup>したがって、調査結果についてもほぼ同じことが述べられており、それを示すと、次のようになる。

- (1) 図書館利用教育の程度による行動への影響は、利用パターンに若干みられるものの、全体的にはあまり反映していない。
- (2) 件名目録やOPACといった図書館に関する知識への影響は、図書館利用教育を受けたものと受けないものとの間に相当の差がみられる。
- (3) 目録、索引やOPACの利用という知識を伴う行動への影響についても図書館利用教育を受けたものと受けないものとの間に差がみられた。
- (4) 目録や索引あるいは開架と閉架等についての認識の差が、図書館利用教育を早期に受けた者とそうでない者との間にあり、早くから始めるほど図書館利用教育の効果が大きいことがわかる。

本調査研究は、こうした先行研究では明らかにされていない図書館利用教育の時期として小学校段階を加え、「詳しく教わった」「簡単に教わった」という回答者の主観的な判断で分類されてしまう設問を避け、「分類法を教わった」「カード目録の利用法について教わった」といった具体的内容について、回答者が今まで受けてきた図書館利用教育と適合するものを選ばせる方法をとった。また岡田氏、佐藤氏の調査では、対象とする大学生が複数の大学の学生であったため、全ての学生が必ずしも同じ環境に置かれているわけではなく、例えば、OPACの無い大学図書館では当然カード目録の利用率が高まり、OPACの有る館と無い館ではその調査結果

に違いが出るということが考えられる。そこで本調査では対象を佛教大学生に絞り、佛教大学図書館の利用行動についてのみ回答してもらった。

本稿では主に次の点を考察することにする。

- (1) 大学生が小学校から大学に至るまでに受けてきた図書館利用教育の内容を明らかにする。
- (2) これまで受けてきた図書館利用教育が、学生の図書館利用にどのくらい影響を及ぼしているかを検討する。
- (3) 図書館利用教育の時期を過去（小学校、中学校、高校）と現在（大学）に分類し、過去受けていることによって、図書館利用にどのような違いが生じているかを明らかにし、将来の生涯学習にどう繋がるかを考察する。
- (4) 図書館利用教育の内容をオリエンテーション段階のものとそれ以上の段階（分類法、カード目録、OPACの利用法など）に分類し、内容が深まることによって、図書館利用にどのような違いが生ずるかを明らかにする。
- (5) 検索ツールについて教わったことが、実際の検索ツールの利用にどの程度影響しているかを検討する。

## 2 調査対象と方法

本調査は、平成9（1997）年6月から7月にかけて、佛教大学の教職課程、図書館司書課程、学校図書館司書課程、共通科目の各授業中に実施したものである。調査はアンケート紙を授業中に配布し、その授業中に時間を割いて実施、授業終了後それを回収したものであり、634名の回答を得た。したがって、調査対象としては佛教大学生であり、専攻分野もなるべく特定の分野に偏らないように注意したが、教職課程を受講中の学生が多数を占めたため、教育学部の学生が全体的にみて多くなった。なお、佛教大学通学課程の学部総在籍学生数は6,117名である。したがって、今回の調査の全対象者うち10.36%から回答を得たことになる。本調査回答者の各学科ごとの人数は【表1】に示すとおりである。次に各回生ごとの人数を示したものが【表2】である。4回生は授業登録者自体が少ないため、他の回生に比べ人数が少なくなっている。男女の数は【表3】に示したが、ほぼ半数ずつということが出来る。分析は調査統計パッケージ SPSS によって行った。

【表1】学科別調査人数

学科	人数
仏教	40 (6.3%)
史	40 (6.3%)
国文	49 (7.8%)
中国文	10 (1.6%)
英文	30 (4.8%)
教育	194 (30.8%)
社会教育	134 (21.3%)
社会	41 (6.5%)
応用社会	46 (7.3%)
社会福祉	46 (7.3%)
NA/DK	4 (MISSING)
計	634 (100%)

【表2】回生別調査人数

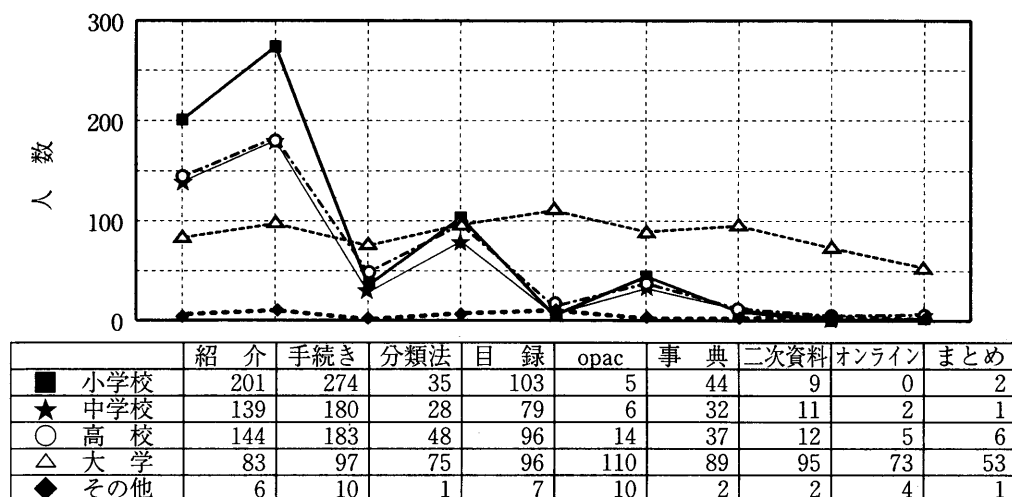
回生	人数
1 回生	197 (32.2%)
2 回生	132 (21.6%)
3 回生	227 (37.2%)
4 回生	53 (8.7%)
5 回生以上	2 (0.3%)
NA/DK	23 (MISSING)
計	634 (100%)

【表3】男女別調査人数

性別	人数
男	300 (47.6%)
女	330 (52.4%)
NA/DK	4 (MISSING)
計	634 (100%)

### 3 調査結果

本調査で明らかとなった大学生が小学校から大学に至るまでに受けてきた図書館利用教育の内容は次の通りである。はじめに、受けた場所であるが全体の何%がいつ受けたかについて示すと、小学校 (46.3%)、中学校 (31.9%)、高校 (31.9%)、大学 (27.2%)、その他の場 (3.2%)、受けたことがない (16.5%)、覚えていない (20.5%) となる。よって、46.3%の学生が小学校で受けたことがあると答えており、最もこれが多い。次に中学校、高校が同率で続き大学は全体の27.2%と低率である。そしてその内容であるが、(1)図書館の施設紹介、資料の配置場所についての案内、(2)閲覧、貸出の手続きの仕方、(3)資料の分類 (日本十進分類法など) の仕組みと配架について、(4)カード目録の利用法、(5)コンピュータ目録 (OPAC) の利用法、(6)百科事典、年鑑、辞典などの利用法、(7)二次資料の利用法、(8)オンライン検索法、(9)調査資料のまとめ方、の中から該当するもの全てを選んでもらうようにした。【図1】がその人数を示したものである。



【図1】図書館利用教育の内容

【図1】をみると、小学校から大学までの図書館利用教育の内容にいくつかの特徴を見出すことができる。1つは、小学校、中学校、高校の各項目間の比率がほぼ同じということである。特に、中学校と高校はどの項目においても、ほとんど違いがない。これら小学校、中学校、高校の特徴は、オリエンテーション段階の(1)図書館の施設紹介、資料の配置場所についての案内と(2)閲覧、貸出の手続きの仕方が多く、次いで(4)カード目録の利用法が続き、そのほかの項目はどれも少ないというものである。また、「(4)カード目録」が多く(5)コンピュータ目録(OPAC)の利用法が少ないのは、小学校から高校の学校図書館ではOPACよりカード目録を設置している図書館の方が主流であるからであろう。

2つめは、大学では、オリエンテーションから文献探索法、資料のまとめ方まで幅広い図書館利用教育が小、中、高校よりも実施されていることである。大学においては、小学校から高校までとは全く異なった形で図書館利用教育が行われていることが推測される。

3つめは、「(1)施設紹介」「(2)手続きの仕方」とそれ以外で受講者数の面から大きく2つに分けられる。大学においてはこの区分をすることはできないが、小学校から高校まではこの2つには人数に大きな差がある。よって、大学生が今までに受けてきた図書館利用教育は、「(1)施設紹介」「(2)手続きの仕方」というオリエンテーションが高い割合を占めるので、当然オリエンテーションだけしか受けていない学生が多くいることになる。

#### 4 関連データの分析

##### (a) 図書館利用教育の有無と図書館利用

本調査における全回答者を小学校から大学、そしてその他の場所で1度でも図書館利用教育

を受けたことがある学生と「受けたことがない」または「覚えていない」と回答した学生とに分け、前者を図書館利用教育を受けたグループ、後者を図書館利用教育を受けてないグループとした。したがって、ここでは学生が受けた図書館利用教育の時期、内容は問わず、どの様な形であれ図書館利用教育を受けた学生と受けていない学生に分け、その相関をみたものである。はじめに、図書館利用教育の有無と図書館利用回数の相関をみた。(【表4】参照)

【表4】 利用教育と利用回数

	毎日	週2,3回	週1回	月1,2回	ほとんど 行かない	全く 行かない	計
受けた	17.6 (69)	38.7 (152)	22.1 (87)	5.9 (23)	15.0 (59)	0.8 (3)	100.0 (393)
受けていない	14.7 (34)	40.7 (94)	16.9 (39)	7.8 (18)	17.3 (40)	2.6 (6)	100.0 (231)

$\chi^2 = 7.56192$  (n.s.)

【表4】は、図書館利用教育を受けた学生と受けてない学生の図書館利用回数をそれぞれパーセンテージとカッコをして実数で示したものである。これをみると、図書館利用教育を受けた学生がそうでない学生に比べ、毎日図書館を利用する学生の割合が高く、ほとんど行かない、そして全く行かない学生の割合が低い。このように、受けた学生と受けてない学生の間に若干の違いがみられるものの、カイ二乗検定の結果では、有意な差はみられなかった。「ほとんど行かない」「全く行かない」と回答した学生については、その理由を問うているが、これについての相関をみたものが、【表5】である。図書館を利用しない学生のうち、その項目が、利用しない理由に該当すると答えたもののパーセンテージが示されている。カイ二乗検定の結果、相関関係がみられたものについては、「\*」を付した。1つのものは10%水準で、2つのものは5%水準で、3つのものは1%水準で、4つのものは0.1%水準でそれぞれ有意であることを示す。

【表5】 図書館利用教育と利用しない理由 (単位：%)

	受けた	受けてない	有意水準
時間無い	49.2	22.2	*** (p < .01)
雰囲気悪い	4.8	6.7	
手続きが面倒	12.7	8.9	
関心ある資料が無い	34.9	37.8	
利用する必要が無い	27.0	40.0	
読みたい図書は購入	12.7	17.8	
他の図書館を利用	12.7	13.3	
その他	6.3	8.9	

【表5】をみると、図書館を利用しない学生のうち、時間が無いので利用しないと答えた学生が、図書館利用教育を受けた学生では49.2%であり、受けてない学生では22.2%であった。「時間が無い」に関しては、カイ二乗検定の結果、1%水準で有意であった。これは、図書館利用教育を受けた学生には時間が無いから仕方なく利用できない者の比率が高いことを表している。また、「利用する必要が無い」と回答した割合が、受けてないものに比べて受けたほうが低かった。他の理由については、受けたことによる影響はみられなかった。しかし、ここで図書館利用教育を受けた学生がそうでない学生に比べ、時間が理由と回答する割合が有意に高く、「利用する必要が無い」という利用者の動機に関する回答が低いことは、図書館利用教育の効果の1つの現れではないだろうか。

次に、利用時間、そして貸出冊数との相関をみたものが、【表6】と【表7】である。【表6】では、図書館を1日平均何時間利用するか問うたところ、図書館利用教育の有無と利用時間との間で特に相関関係はみられなかった。よって、図書館利用教育は、学生の図書館利用時間には影響を及ぼさないということになる。【表7】においては、1ヶ月あたり平均何冊借り出すかを問うたところ、受けた学生が受けてない学生に比べ、貸出冊数0冊の割合が低く、その他は高いことが示されている。これはカイ二乗検定の結果、1%水準で有意であった。したがって、図書館利用教育を受けたことによって、貸出冊数に伸びが見られることが明らかになった。

【表6】 図書館利用教育と利用時間

	0-1時間	1-2時間	2-3時間	3-4時間	5時間以上	計
受けた	36.4 (143)	51.4 (202)	10.4 (41)	1.0 (4)	0.8 (3)	100.0 (393)
受けてない	42.2 (97)	43.9 (101)	12.2 (28)	1.7 (4)	0.0 (0)	100.0 (230)

$$\chi^2 = 5.67416 \text{ (n.s.)}$$

【表7】 図書館利用教育と貸出冊数

	0冊	1-2冊	3-5冊	6冊以上	計
受けた	37.2 (145)	48.2 (188)	13.6 (53)	1.0 (4)	100.0 (390)
受けてない	50.4 (116)	43.0 (99)	6.1 (14)	0.4 (1)	100.0 (230)

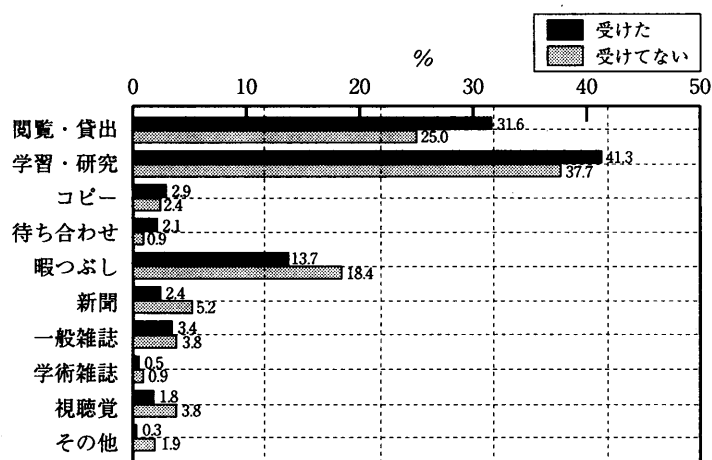
$$\chi^2 = 15.03391^{***} \text{ (p} < .01 \text{) df} = 3 \text{ 1\%水準有意}$$

図書館利用教育を受けることによって、図書館を利用する目的に違いが現れるかどうかを示したものが、【表8】である。「閲覧・貸出」「学習・研究」「視聴覚」の3変数については、カイ二乗検定の結果、相関関係がみられた。つまり、受けた学生はそうでない学生に比べて、図

書館を利用する目的を「図書館の蔵書を閲覧・貸出するため」「学習・研究の場として閲覧席を利用するため」「視聴覚ブースを利用するため」とする比率が高いことが明らかとなった。こうした図書館利用教育を受けたことによる学生の利用目的の相違は、主な目的での回答と共に考察すると、より鮮明になって現れてくる。【図2】は図書館を利用する目的の中から特に1つ選ばせた主な目的と図書館利用教育の有無との関係を示したものである。

【表8】 図書館利用教育と図書館を利用する目的 (単位：%)

	受けた	受けてない	有意水準
閲覧・貸出のため	64.3	55.3	** (p < .05)
学習・研究のため	61.0	52.6	** (p < .05)
コピーを使用のため	34.4	30.7	
待ち合わせ	17.6	14.9	
暇つぶし	49.7	54.4	
新聞を読むため	14.0	16.2	
一般雑誌を読むため	27.8	29.8	
学術雑誌を読むため	6.9	4.4	
視聴覚ブース使用	18.6	12.7	* (p < .10)
その他	1.3	2.6	



【図2】 図書館利用教育と主な目的

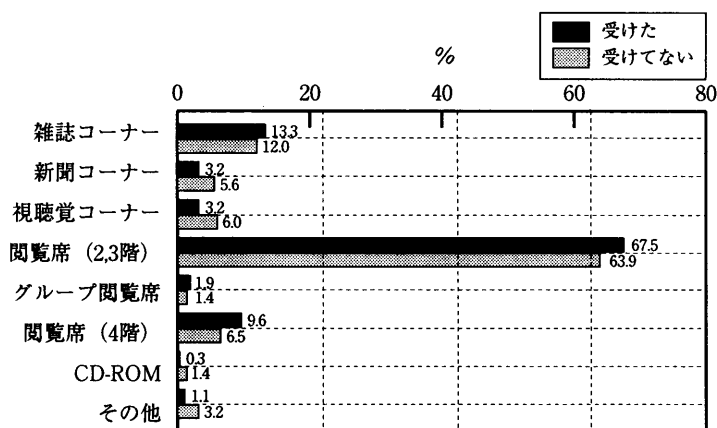
【図2】をみると、受けた学生がそうでない学生に比べて、「閲覧・貸出」「学習・研究」のためと回答している割合が高く、「暇つぶしのため」と回答している割合が低い。このことは、主な目的を暇つぶしとする図書館を積極的に活用しているとは思われないグループが図書館利用教育によって減ったことを示している。つまり、受けた学生はOPAC、目録、分類法等、様々の利用法を教わっているので、図書の閲覧・貸出が容易になり、学習・研究が促進される。それに対して、受けていない学生は利用法を知らないので、閲覧・貸出に支障をきたし、学習・研究のためとする割合が減り、その代わりに暇つぶしのためという割合が増えたと考え



られる。これは、【表8】の「閲覧・貸出」「学習・研究」を利用目的に該当するものとして、選んだ比率の違いにも現れている。

【表9】図書館利用教育と利用する場所 (単位: %)

	受けた	受けてない	有意水準
雑誌コーナー	44.0	46.9	
新聞コーナー	14.7	21.1	** (p < .05)
視聴覚コーナー	19.0	13.2	* (p < .10)
閲覧席 (2, 3階)	83.8	81.1	
グループ閲覧席	3.3	4.8	
閲覧席 (4階)	32.9	30.3	
マイクロ室	0.3	0.4	
CD-ROM コーナー	6.9	3.9	
地図閲覧室	1.5	1.3	
その他	3.1	3.1	



【図3】図書館利用教育と主な場所

同じように、利用する場所との相関をみたものが、【表9】である。有意な差となって現れているのは、「新聞コーナー」「視聴覚コーナー」だけで、その他の項目は図書館利用教育を受けていてもいなくても、あまり関係が無いことがわかる。主に利用する場所との関係を示したのが【図3】である。ここでも、【表9】で示されたように、受けた学生がそうでない学生に比べ、「新聞コーナー」「視聴覚コーナー」の割合が低くなっている。

次に、資料を探す時に最初にとる方法との相関を示したのが、【表10】である。これからは、図書館利用教育を受けたことによる影響がほとんど無いことがわかる。そして、検索ツールの利用の程度との相関について示したのが、【表11】である。受けた学生、受けてない学生のOPAC、カード目録、CD-ROM、参考図書の利用程度をパーセンテージにして示した。どの検索ツールについても、受けた学生はよく利用する比率が高く、全く利用しない比率が低い。

しかし有意な差となって現れているのは、1つだけであった。図書館利用教育の影響が最も顕著に現れるのが、この検索ツールの利用の程度の違いだと考えていたが、結果を見ると、有意な差となって現れているものは、カード目録の利用程度だけで、全体的には図書館利用教育の影響はみられないことがわかった。では、ほんとうに検索ツールの利用法を教わった学生は、検索ツールを利用していないのであろうか。これについては次節以降で考察することとする。

【表10】 図書館利用教育と資料を探す方法

	直接書架へ	目録を用いる	係員に聞く	友人に聞く	その他	計
受けた	55.1 (210)	35.7 (136)	5.5 (21)	3.4 (13)	0.3 (1)	100.0 (381)
受けてない	56.8 (126)	32.4 (72)	7.2 (16)	3.6 (8)	0.0 (0)	100.0 (222)

$\chi^2 = 1.75511$  (n.s.)

【表11】 図書館利用教育と検索ツールの利用 (単位: %)

		よく利用する	たまにする	あまりしない	全くしない	有意水準
OPAC	受けた	37.1	20.3	13.2	29.4	
	受けてない	26.7	17.2	22.6	33.5	
カード目録	受けた	2.9	18.5	27.9	50.7	* ( $p < .10$ )
	受けてない	2.4	11.4	25.2	61.0	
CD-ROM	受けた	4.9	7.5	14.6	73.0	
	受けてない	1.4	8.1	11.5	78.9	
参考図書	受けた	7.5	20.8	28.0	43.7	
	受けてない	5.8	17.3	27.9	49.0	

以上のように、図書館利用教育を受けた学生と受けてない学生との間の図書館利用の相違を見ることによって、図書館利用教育の影響を考察した。この結果、図書館利用教育が学生の図書館利用に良い影響を及ぼしたと考えられるのは、図書館を利用しない理由、貸出冊数、図書館を利用する目的、利用する場所であった。逆に、若干の相違があるものの、はっきりとした違いが見られなかったものに、利用回数、利用時間、資料を探す方法、検索ツールの利用がある。特に、資料を探す方法、検索ツールの利用は、図書館利用教育がこれらの利用法を教育するものであることから、当然教育を受けた学生はそうでない学生に比べ利用率が高いという結果となって現れるべきものである。しかし、ここでは両者の間に相違は見られない。これは先に明らかになったように図書館利用教育を受けた学生の中には、オリエンテーションだけしか受けていない学生が多いからであろう。当然オリエンテーションではこれらの検索ツールの利用法の指導までは行っていない。したがって、図書館利用教育を受けた学生の中から、オリエンテーションだけしか受けていない学生を除くと、これらの間に相関関係がみられるのではないだろうか。

(b) 図書館利用教育の程度と図書館利用

この節では、前節で相関関係がみられなかった利用回数、利用時間、資料を探す方法、検索ツールの利用を中心に、詳細に図書館利用教育を受けたものに違いが現れるかを考察したい。図書館利用教育の中でも、オリエンテーションは施設の紹介や閲覧・貸出手続きの説明等であるので、初歩的な図書館利用教育と言える。それに対して、目録の利用法や二次資料の利用法の指導等は高次の図書館利用教育と言える。そこで、図書館利用教育を受けた学生の内、オリエンテーションだけしか受けていない学生は初歩的に教わったグループ（以下、初歩）とし、オリエンテーションと高次の図書館利用教育を受けた学生と高次の図書館利用教育だけを受けた学生を高次に教わったグループ（以下、高次）とした。【表12】から【表14】は、この2つのグループと図書館利用教育を受けていないグループの利用回数、利用時間、貸出冊数を示したものである。

【表12】 図書館利用教育の程度と利用回数（単位：％）

	毎日	週 2, 3	週 1	月 1, 2	ほとんど無い	全くない	サンプル(人)
受けた (高次)	19.3	36.2	23.9	5.6	14.3	0.3	301
受けた (初歩)	11.6	47.7	16.3	7.0	15.1	2.3	86
受けてない	14.7	40.7	16.9	7.8	17.3	2.6	231

【表13】 図書館利用教育の程度と利用時間（単位：％）

	0－1時間	1－2時間	2－3時間	3－4時間	5時間以上	サンプル(人)
受けた (高次)	34.9	52.5	11.6	0.7	0.3	301
受けた (初歩)	41.9	47.7	5.8	2.3	2.3	86
受けてない	42.2	43.9	12.2	1.7	0.0	230

【表14】 図書館利用教育の程度と貸出冊数（単位：％）

	0冊	1－2冊	3－5冊	6冊以上	サンプル(人)
受けた (高次)	36.8	47.8	14.4	1.0	299
受けた (初歩)	38.8	50.6	9.4	1.2	85
受けてない	50.4	43.0	6.1	0.4	230

【表12】【表13】【表14】をみると、利用回数、利用時間、貸出冊数の全てにおいて、「高次」のグループには極端ではないが図書館を利用する学生が多く、利用しない学生が少ないことが分かる。したがって、教わる内容が詳細であればあるほど、図書館利用に効果が出ていることがわかる。同じように、資料を探す時最初にとる方法を示したものが【表15】であり、OPAC、カード目録、CD－ROM、参考図書の検索ツール利用を示したものが【表16】から【表19】である。

【表15】 図書館利用教育の程度と資料を探す方法 (単位：％)

	直接書架	目録	係員	友人	その他	サンプル(人)
受けた (高次)	53.1	38.0	5.5	3.1	0.3	292
受けた (初歩)	64.0	26.7	4.7	4.7	0.0	86
受けてない	56.8	32.4	7.2	3.6	0.0	222

【表16】 図書館利用教育の程度と OPAC の利用 (単位：％)

	よく利用する	たまにする	あまりしない	全くしない	サンプル(人)
受けた (高次)	41.2	17.6	11.8	29.4	296
受けた (初歩)	24.1	26.5	19.3	30.1	83
受けてない	33.5	22.6	17.2	26.7	221

【表17】 図書館利用教育の程度とカード目録の利用 (単位：％)

	よく利用する	たまにする	あまりしない	全くしない	サンプル(人)
受けた (高次)	3.1	19.9	28.6	48.4	287
受けた (初歩)	2.5	11.3	23.8	62.5	80
受けてない	2.4	11.4	25.2	61.0	210

【表18】 図書館利用教育の程度と CD－ROM の利用 (単位：％)

	よく利用する	たまにする	あまりしない	全くしない	サンプル(人)
受けた (高次)	5.6	8.1	15.4	70.9	285
受けた (初歩)	1.3	5.0	10.0	83.8	80
受けてない	1.4	8.1	11.5	78.9	209

【表19】 図書館利用教育の程度と参考図書の利用 (単位：％)

	よく利用する	たまにする	あまりしない	全くしない	サンプル(人)
受けた (高次)	8.0	23.8	29.0	39.2	286
受けた (初歩)	5.1	10.1	22.8	62.0	79
受けてない	5.8	17.3	27.9	49.0	208

資料を探す時最初にとる方法については、図書館利用教育の影響が出やすいものの1つと考えていたが、実際には【表15】に示されているとおり、ほとんど関係は無いようである。次に、検索ツールの利用だが、どれにおいても「高次」のグループは「全く利用しない」学生が少なく、「よく利用する」学生が多い。そして、「初歩」のグループは、どの検索ツールにおいても、この3グループの内でも「全く利用しない」割合が高く、あまり検索ツールを利用していない傾向を示している。したがって、ここでは「高次」の図書館利用教育を受けたことが、その後の検索ツールの利用に反映されていることがわかる。

図書館利用教育の程度と図書館利用について考察してきたが、やはり詳細に教わった学生は図書館利用にも若干良い影響がみられることが結論づけられる。しかし、オリエンテーションのみを受けている学生は、かえって受けていない学生より図書館を利用しない傾向にあるというのはどうしてだろうか。オリエンテーションは図書館を印象づけるという効果があり、オリエンテーションを受けた学生が、何も受けていない学生より図書館を利用しないということは無いはずである。ここでの「高次」のグループは大部分がオリエンテーションと高次の図書館利用教育を両方受けた学生である。よって、オリエンテーションだけを受けている学生は、情報検索法等の「高次」の図書館利用教育を受ければ、図書館利用が促進される可能性を十分持っているのである。このことは、逆に言うと、オリエンテーションだけでは図書館利用に直接結びつかないことを表している。したがって、図書館利用教育はオリエンテーション段階までで終わるのではなく、検索ツールの利用法、二次資料の利用法等の情報探索法、情報整理法まで指導しなければ、図書館利用に効果が出ないことが明らかとなった。

#### (c) 図書館利用教育の時期と図書館利用

次に学生が図書館利用教育を受けた時期によって、その後の図書館利用にどのような変化が起るのかを見ていきたい。先行研究によれば、「図書館というものに対する意識というものは早い時期に図書館利用指導をきちんと受けることによって良い方向へ進むこと」が明らかにされている。また、本調査によって学生がこれまでに受けた図書館利用教育の内容には小学校から高校までと大学で大きく分けられることが明らかとなっている。すると、小学校から高校までの間に図書館利用教育を受けた学生は、その受けた内容からも図書館利用への影響のされ方からも、他の学生とは全く異なった集団であることがうかがえる。ここでは、小学校から高校までに指導を受けたことがその後の図書館利用にどのような様に反映し、また加えて大学で指導を受けることがどの程度の相乗効果を生むかを考察したい。最初に、小学校から高校までで図書館利用教育を受けた学生を過去教わった経験の有る学生とし、大学で受けた学生を現在教わった経験の有る学生として分類したものが【表20】である。これによると、過去受けた者の約4割が現在も受けており、このグループが最も図書館利用教育の効果が期待される集団である。また、過去受けた者の6割強が現在受けていないグループであり、この集団が過去に受けた図書

館利用教育のその後の効果を計る目安となるものである。一方、過去に受けていない者は、8割強が現在も受けていないことがわかる。過去受けていない者のうち、現在で受けた者はわずか16%である。

【表20】過去＝現在の図書館利用教育 (単位：%)

	現在・有	現在・無	計 (サンプル)
過去・有	36.0	64.0	100.0 (347)
過去・無	16.2	83.8	100.0 (277)

そこで、それぞれのタイプの集団が、現在大学図書館をどれぐらい利用しているかを考察してみる。【表21】から【表23】はそれぞれの集団の図書館利用回数、利用時間、貸出冊数を示したものである。これによると、図書館を最もよく利用している集団は、有＝有型つまり、過去、現在の両方受けているグループと無＝有型の大学に入学して初めて図書館利用教育を受けたグループであることがわかる。したがって、図書館利用教育の時期という面から見た場合、現在教わっている学生は良く図書館を利用し、現在教わっていない学生はあまり図書館を利用しない。それとやはり、大学図書館の利用に直接効果を及ぼすのは、その図書館を設置している機関である大学での図書館利用教育なのだろう。では、小学校から高校までに受けたものはどの様に影響しているのだろうか。利用回数、利用時間、貸出冊数の中で、有＝無型のグループが無＝無型のグループより利用していると認められるのは、貸出冊数だけである。したがって、図書館の利用回数、利用時間、貸出冊数に関しては、小学校から高校で受けた図書館利用教育の効果は、貸出冊数で若干見られる以外さほど現れていない。

【表21】図書館利用教育の時期と利用回数 (単位：%)

(過去＝現在)	毎日	週 2, 3	週 1	月 1, 2	ほとんど無い	全く無い	サンプル(人)
有＝有	19.2	42.4	21.6	4.8	12.0	0.0	(125)
有＝無	14.0	36.5	23.4	6.3	18.9	0.9	(222)
無＝有	28.9	40.0	17.8	6.7	4.4	2.2	(45)
無＝無	15.1	40.5	16.8	7.8	17.2	2.6	(232)

【表22】図書館利用教育の時期と利用時間 (単位：%)

(過去＝現在)	0－1時間	1－2時間	2－3時間	3－4時間	5時間以上	サンプル(人)
有＝有	28.8	52.0	18.4	0.0	0.8	(125)
有＝無	41.9	49.5	6.3	1.4	0.9	(222)
無＝有	31.1	57.8	8.9	2.2	0.0	(45)
無＝無	42.0	44.2	12.1	1.7	0.0	(231)

【表23】図書館利用教育の時期と貸出冊数 (単位：%)

(過去＝現在)	0冊	1－2冊	3－5冊	6冊以上	サンプル(人)
有＝有	26.8	51.2	21.1	0.8	(123)
有＝無	43.9	46.2	8.6	1.4	(221)
無＝有	33.3	48.9	17.8	0.0	(45)
無＝無	50.2	43.3	6.1	0.4	(231)

次に、同じように資料を探す時に最初にとる方法を示したものが【表24】である。ここで興味深いのは、有＝有型と無＝有型の大学で教わった両グループの「目録」と回答している比率が他と比べて高いことである。これは「目録」に代表される検索ツールを現在つまり大学で図書館利用教育を受けた学生がよく利用していることを示している。大学ではオリエンテーションから情報検索法、情報整理法まで幅広く教育を行っている先の調査結果から考察すると、大学で教わった学生は検索ツールをよく利用していることが推測される。【表25-1】から【表28-1】はOPAC、カード目録、CD－ROM、参考図書の利用を示したものである。

【表24】図書館利用教育の時期と資料を探す方法 (単位：%)

(過去＝現在)	直接書架	目録	係員	友人	その他	サンプル(人)
有＝有	54.6	41.2	4.2	0.0	0.0	(119)
有＝無	62.0	26.4	5.6	5.6	0.5	(216)
無＝有	24.4	66.7	6.7	2.2	0.0	(45)
無＝無	56.5	32.3	7.6	3.6	0.0	(223)

【表25-1】図書館利用教育の時期とOPACの利用 (単位：%)

(過去＝現在)	よく利用する	たまにする	あまりしない	全くしない	サンプル(人)
有＝有	46.8	19.4	16.1	17.7	(124)
有＝無	25.1	22.8	13.0	39.1	(215)
無＝有	68.9	11.1	6.7	13.3	(45)
無＝無	33.3	22.5	17.1	27.0	(222)

【表26-1】図書館利用教育の時期とカード目録の利用 (単位：%)

(過去＝現在)	よく利用する	たまにする	あまりしない	全くしない	サンプル(人)
有＝有	4.9	21.3	32.8	41.0	(122)
有＝無	2.4	19.0	24.8	53.8	(210)
無＝有	0.0	7.5	30.0	62.5	(40)
無＝無	2.4	11.4	25.1	61.1	(211)

【表27-1】 図書館利用教育の時期と CD-ROM の利用 (単位: %)

(過去=現在)	よく利用する	たまにする	あまりしない	全くしない	サンプル(人)
有=有	9.2	10.8	15.8	64.2	(120)
有=無	1.9	5.3	11.0	81.8	(209)
無=有	7.3	9.8	26.8	56.1	(41)
無=無	1.4	8.1	11.9	78.6	(210)

【表28-1】 図書館利用教育の時期と参考図書の利用 (単位: %)

(過去=現在)	よく利用する	たまにする	あまりしない	全くしない	サンプル(人)
有=有	14.9	27.3	28.3	29.8	(121)
有=無	2.9	16.7	27.3	53.1	(209)
無=有	7.5	22.5	32.5	37.5	(40)
無=無	6.2	17.2	27.8	48.8	(209)

【表25-1】【表27-1】【表28-1】をみると、OPAC と CD-ROM と参考図書の利用に関しては、有=有型と無=有型という大学で教わったグループがよく利用している。しかし、【表26-1】をみると、カード目録では、最もよく利用しているのが有=有型のグループで、最も利用していないのが無=有型であるから、他の3つの検索ツールとは異なる結果が出ている。これは、他の3つの検索ツールは小学校から高校で教わっている学生がほとんどいなかったのに対し、カード目録は小学校から大学までほぼ同じ人数の学生が教わっており、その効果の現れであろう。それを示すのが【表25-2】から【表28-2】である。なお、CD-ROM については、小学校で教わった学生はいなかった。これらの表は、1つの検索ツールの利用法を教わった学生がどの程度その検索ツールを利用しているかを示している。例えば【表26-2】では、小学校でカード目録の利用法を教わった学生が100人おり、その学生のカード目録の利用程度がパーセンテージで示されている。これによるとカード目録では、小学校で教わった学生の利用している比率が最も高く、続いて高校、中学、大学となっている。したがって、カード目録では無=有型という大学でのみ教わっているグループが他のグループより利用していないという他の検索ツールとは異なる結果になったのである。このことから、検索ツールの利用法を教わった学生は、その後利用する図書館が変わっても、その検索ツールを利用し続けることがわかる。

【表25-2】 OPAC の教育時期と OPAC の利用 (単位: %)

	よく利用する	たまにする	あまりしない	全くしない	サンプル(人)
小学校	60.0	20.0	0.0	20.0	(5)
中学校	50.0	0.0	0.0	50.0	(6)
高校	42.9	28.6	7.1	21.4	(14)
大学	54.5	18.2	12.7	14.5	(110)



【表26-2】カード目録の教育時期とカード目録の利用 (単位：%)

	よく利用する	たまにする	あまりしない	全くしない	サンプル(人)
小学校	6.0	17.0	31.0	46.0	(100)
中学校	4.0	21.3	38.7	36.0	(75)
高校	4.4	26.4	29.7	39.6	(91)
大学	3.3	19.8	31.9	45.1	(91)

【表27-2】CD-ROMの教育時期とCD-ROMの利用 (単位：%)

	よく利用する	たまにする	あまりしない	全くしない	サンプル(人)
小学校	0.0	50.0	0.0	50.0	(2)
高校	0.0	40.0	20.0	40.0	(5)
大学	14.1	12.7	16.9	56.3	(71)

【表28-2】参考図書の教育時期と参考図書の利用 (単位：%)

	よく利用する	たまにする	あまりしない	全くしない	サンプル(人)
小学校	0.0	12.5	37.5	50.0	(8)
中学校	10.0	10.0	30.0	50.0	(10)
高校	16.7	8.3	16.7	58.3	(12)
大学	15.1	32.3	24.7	28.0	(93)

## 5 おわりに

以上、図書館利用教育について、その教育の有無、程度、時期という3つの分析視点にしたがって、大学生の図書館利用を規定する要因の分析を進めてきたが、最も効果的な図書館利用教育のプログラムを開発していく必要と思われる以下の結果を得ることができた。

(1) 図書館利用教育を受けた学生と受けていない学生の間で差が見られたのは、図書館を利用しない理由、貸出冊数、図書館を利用する目的、利用する場所であった。逆に、利用回数、利用時間、資料を探すとき最初にとる方法、検索ツールの利用は、図書館利用教育の有無だけでは差はみられなかった。

(2) 図書館利用教育を受けた学生の中から、オリエンテーションだけを受けた学生を抜き出し、これらと全く受けていない学生との3グループの図書館利用について考察したところ、最もよく図書館を利用しているのは、オリエンテーションから情報検索法、情報整理法までの教育を受けているグループであった。また、オリエンテーションだけしか受けていないグループは、全く受けていないグループより図書館を利用しない傾向にあることが明らかとなった。したがって、図書館利用教育を実施する際には、オリエンテーションだけでは学生の図書館利用に直接効果を及ぼさないことを考慮し、オリエンテーションから情報検索法、情報整理法、情報表現法まで幅広い図書館利用教育計画を策定しなければならない。

(3) 図書館利用教育を受けた時期を過去と現在に分け、過去の有無と現在の有無の組み合わせで、合計4グループに分類したところ、図書館利用回数、利用時間、貸出冊数では、過去の有無に関係なく、現在受けている2グループの利用が高かった。しかし、検索ツールの利用になると過去、現在両方受けているグループが最も利用している。よって、検索ツールに関しては、利用法を教わった時期がたとえ昔であっても、一度教われれば、学生はその後もその検索ツールを利用し続けることが明らかとなった。したがって、より効果的な図書館利用教育には、小学校から大学に至る一貫性が求められるのである。

#### 註

- (1) 切石文士、岡田茂「大学生の図書館利用の状況と課題 — 別府大学学生の意識調査を通して —」, (『図書館学』no.66, 1995年) p.40
- (2) 長田秀一「図書館利用者教育に関する若干の考察 — 亜細亜大学学生に対するアンケート調査を踏まえて —」, (『亜細亜大学教養部紀要』第30号, 1984年) p.35
- (3) 岡田靖「大学図書館における目録利用：予備調査報告」, (『図書館学会年報』vol.22 no.1, 1976年) p.42~48
- (4) 岡田靖「大学生の図書館利用に関する調査報告と分析 — 相関データを基に」, (『鶴見大学紀要』第32号, 1995年) p.237~254
- (5) 佐藤允昭「大学生の図書館利用に関する調査報告と分析 図書館利用教育と図書館における行動及び知識との相関データを基に」, (『図書館学』no.69, 1996年) p.30

(わたなべ ゆういつ 教育学研究科) 1998年10月14日受理